

ひまわりからの

メッセージ

27号

2013.6.11

西濃園域
発達障がい支援センター

ひまわり

発行：中野み子

どくだみの花

先日、久しぶりにコーヒーを飲みに行きました。昔はよく行ったお店でしたが、ここ何年もの間私は、喫茶店でゆつくりとコーヒーをいただくという生活とは程遠い日々を送っていました。

お店の女主人は、外で花を植えておられるところでしたが、私の顔を見て「二十年ぶりですね」と、おっしゃるのです。「そんなにになりますか……」「ええ、本当にお久しぶりです。今でも、ひまわり学園に？」とたずねられています。私は驚きました。覚えていて下さったことを嬉しく思いました。しばらく外で、植えられている萩や紫陽花、珍しい土佐水木などの木々について立ち話をし、店内に入ると、一輪さしの花びんに、どくだみの花が

生けてありました。どくだみは毒を矯める、止めると

いうところからつけられた名だということですが、店内

の一隅におかれた花は凜とした存在感がありました。

実は、職員室の隣室に一枚の絵がかけてあります。

星野富弘さんのどくだみの花の絵で、そこには、次の

ようなことが添えられています。私が園長になった

お前を大切に摘んでいく人がいた。

臭いといわれ

嫌われ者のお前だったけれど

道の隅で歩く人の足許を見上げ

ひっそりと生きていた。

いつかお前を必要とする人が

現れるのを待つていたかのように、

おまえの花 白い十字架に似ていた。

年に掲げた額ですから、色あせてもう外して下さってもいいのに、きくと現園長は私を氣遣って、外さずにおいて下さるのでしよう。

一日に一度、その額を見上げ、どんな人でも、社会の

中で何かの役に立って生きていると思おうのです。自分を

必要としてくれる人がいると思おうこと

は、子どもたちが自分を大切に

することにつながっていくのではないだろうか。



子どもたちの支援に

様々な工夫を……！

保育園や学校に伺うことが多くなり、室内の環境がとても気になるようになりました。

岐阜県の障害福祉課の事業に地域療育システム事業というものがあり、三重県のある学園（自閉症児の入院治療を行っている施設）が開発したCLMというツールを使った支援を市町ですめています。

CLMの生みの親でもあり、子どもたちの途切れのない支援を訴えつづけておられる中村みゆき先生は、保育士さんを前にいつもおっしゃることがあります。それは、集団の中での支援のまず第一は、環境の整備であるということです。

通常の保育の中で整理された過ぎしやすい環境が用意されているかどうかというと、先生が立って子どもたちに話をするバックに、色々なものがいっぱ

い貼ってあります。誕生月の絵もあれば、当番表もある。視覚支援に必要だから時計がいくつもある。書かれている。物の位置も雑然としている……これでは、先生のお話を聞きなさいと言う方がまじがっています。視界に入ってくるものが余りにも多すぎるのですから……

教育現場でもインクルーシブ教育という方向性が打ち出され、教室の前面にカーテンをつけて、子どもたちが授業の中で集中しやすい状況を作り出していくという話も聞きますが、興味深いことです。

目で見る、耳で聞くという感覚は人それぞれに違っているのだと思います。そして、年令と共に変化していくものだという気がしています。若い頃の私は、大屋根に上るのは少しもこわくありませんでしたが、歩道橋が大の苦手でした。横幕があれば、何ともないのに、歩道橋の手すりを通して下を歩き交う車の動きが目に入ると途端に足がすくんでしまったものです。私の亡くなった父は、病床

に花を飾った私に、「ありがとう。でも強く目に入ってくるんだよ。悪いがへやの隅に置いてくれないか……。」と言いました。教え子の中には、フラインドのしま模様が発作のひき金になった子もいましたし、授業中に消しゴムを落としても探し出せず、先生は「そこにあるでよ……。」とおっしゃるのですが、どうしても探すことができません。パニックになってしまおうという子もいました。

最近、自分の体験や子どもたちのことを考えながら見ていると、余分な視覚刺激が多い教室環境がとても気になります。

家庭でも実は同じことが言えると思います。私はとても片づけが下手なので、雑然と物が置かれてある状態なのです。（とは言え、人の手が入るとすぐにわかるのですが……）今のこの私の家で子どもを育てたり、きつと片づけのできない子になるのではないか……という気がします。「明日、学校へ持っていく物が見つからないよ……。」ということも起きるかもしれません。

清潔、整理整頓、物の位置や機能がわかる、温度

騒音など、環境には色々ありますね。園や学校では集団生活がしやすい環境として一日のスケジュールや活動のキ順や当番などがわかりやすくしてあるかどうかということも大切なことでしょう。

中村先生は、第二にクラス全体の約束や活動ルールが明確であることが大切だと言われます。集中して聞けるように注意喚起すること、物の貸し借りのルール、順番のルール、いつ片づけるかのルールなど、園生活の中で身につけるべき力が育っていないまま、就学する子が意外に多いように思います。

学校でも勝手にしゃべっている子に連動して何となくクラス全体がガわついている場合、クラス全体の約束ができていないことが多いようにも思います。一年生のクラスでは、手を挙げて発言する、当てられたら「聞いて下さい」とか「話していいですか」と、お友だちに注意を促す場面をたくさん見かけますが、それでも聞けない子には、第三の支援として加配の先生や支援員がつくといいことになるのでしよう。

衝動性がある、静かに聞くべき時や、先生、友だ

ちが発言している時に勝手にしゃべってしまう子を「とてもよく分かっている子」「かしこい子」という一面だけのとらえ方がなされていいる場合もあります。保育士さんや先生のとらえ方によって、そのクラスがまとまっていかなくなることもあるでしょう。「ダメー」「今は話さない」「などと叱る前に、「発言する時は手をあげて、〇〇さんと言われたら話せます」とルールを決めてあげたいものです。

おそらく、ご家庭でも同じでしょう。ことばの発達ということを考えると、子どものことばにじっくりと耳を傾け、受け止めていくことは大切なことです。けれども四、五歳になっても常に子どもの発言が優先されるという環境は、少し考えたいですね。

子どもが今、誰に注目して聞くべき時なのか、家庭の中でも学ばせていきたいと思ひます。

お母さんたちは「支援員さんがついてもらえばうまくいくはずですよ」とおっしゃるのですが、いつまでもべったりとついでてもらおう支援員は、実は、お子さんの自立を妨げてしまうこともありうることを覚悟してお

きまはう。お母さんにしても支援員さんにしても、今、必要な支援をしていくこと、そして成長と共に支援の手を抜いていくことがとても大切なことなのです。

検査を——ついで

発言見すること

私が一年間にどの位、検査をするのか……先日、社会福祉課の人にたずねられました。百五十人は優にこえているでしょう。検査に一時間二十分、結果を出し、文書を作るのに四十分、そのあとお母さんたちとの話し合い……と考えると、少しこわくなります。検査が、子どもたちのために役立つことを願う今年からは左籍園や学校の先生とお母さん方と一緒に懇談することにさせていたたいたのですが、時間がとれず、ご迷惑をにかけているのが現状です。ところで、検査場面では様々な子どもたちの姿が垣間見えて、新しい発見があります。



Aくんは「わからない」と言いたくない人です。だから黙ってしまいますが、私が「まだ習っていないんだね。教えてもらっていないからね」と言うと、我が意を得たりという感じで表情をくずして、ニコツと笑ってくれます。完璧でいたいですね。

Bくんは、私が手先の動きが見たくて「これも箱の中に片づけて下さい」と言うと、「出した人が片づけるべきです」と不満をぶつけてきました。おそらく彼の中には、「この時にはくすすべきである」というルールがあるのでしよう。

Cさんは、おしゃべりが大好きです。私が質問したことには答えずにどんどん話題を広げていってしまいます。自分のイメージは広げていけるのに、他の人とのコミュニケーションが上手にとれないのです。視線の保持も苦手でした。

Dさんは、とてもよく動きます。体をゴソゴソと動かしたり立てひざをさしたり、身を乗り出したり、じっとしていることは難しいようです。色々な物に興味が移り、私のもっているストロップ

ウオツナも気になって仕方ありませんでした。

Eくんは、お母さんと離れてしまうことに不安で仕方ありません。お母さんの手をギュツと握って、何とかママと一緒にいたいという意思を伝えたのですが、結局離されてしまいました。

このように子どもたちは検査中の取りくみ方やことは使いなどの中に、その子の特性を見せてくれます。カードの取り扱いや鉛筆の持ち方にも、その子の困り感が見えることもあります。そして、何よりも、子どもたちの言語推理の力が見えてきます。つまり、ことばを聞いて、何を聞かれているのか、何を質問されているのか、わかっているのか、検査者の意図をつかむ力です。ことばからイメージを広げていく力と、つまみもいいかもしれません。

学校では、計算はできるけれど文章問題が苦手だったり、本は読めるけれど内容の理解がむづかしいといったことがおきるので、

もちろん検査で全てがわかるなんてことはありませんし、数値だけが一人歩きしてもらっても困りま

す。先生方やお母さん方の中にも、単に数値だけ見て、「通常で大丈夫。やっていけるわけですね。」と思いい込まれる方も多いようですが、実は子どもたちが困るのは、本人の中の差（個人内差）であることが多いのです。

言語理解はあるのに、体の使い方が十分に育っていない子の場合、頭ではできると思って、イメージする完成図と、自分が実際に作り上げたもののギャップが大きすぎて苛立ったり、パニックになったりすることもあるわけです。完璧を望む子は、一〇〇点でなければ、例え九十八点でも暴れるかもしれませんし、「うであるべきだ」と決めている子にとっては、そこから外れてしまう友だちが許せずに実力行使に走ることもあるでしょう。

本当は言語理解はできていないのに、友だちの行動をまねることでノートにもうまく書き、先生の目を誤らせる子もいるでしょう。

そういった一人ひとりに目を配っていたら、一助になれば検査もやり申渡があるというものです。

県では、ウェクスラー検査（WISC）のIV版を使うようになりました。私はお母さん方に説明するのはⅢ版の方がわかってもらいやすいので、今年度はⅢ版でいいこうと決めましたが、検査の分析という作業は、いつでも悩みもあります。

「検査で何がわかるのですか?」と言われる方もありますが、少しでも子どもたちの困っている所を理解し、次のステップにつなげていければいいと思います。何よりも検査による子どもたちが不利益をこうむることがあってはならないと肝に命じているのです。

皆さんの期待に応えられるかどうか……まだまだ修業中の私です。

お知らせ



十一月十二日、まだ先のことですが、小栗正幸先生の「青年期の支援」について講演会を予定しています。

七月例会は、七月九日です。